

厚生労働大臣賞

中学生の部



「コミュニケーションの大切さ」

宇都宮大学共同教育学部附属中学校

3年 岩佐 いわさ 葵 あおい さん

あつ、あの人がこっちに向かって来る。どうする？
何か手伝った方がいい？そんな考えが頭の中をぐる
ぐると駆け巡る。自宅近くの公園には車椅子に乗っ
て訪れる人がいる。その人を見かけるたびに私はそ
わそわ、どきどきしてしまふ。だが、私は声をかけ
ることすらできない。それはなぜかという、以前
あるテレビ番組で障害者の方の声として「何でも手
伝ってほしいわけではない。」と報道されていたから
だ。それ以降、私が手伝おうとしていることが逆に
迷惑になるのではないか、と不安な気持ちが心の大
部分を占め、声をかけることすらできなくなっ

まったのだ。

そんな悩みを特別支援学校で教員として働いてい
る母の友人に話したときだった。

「その人に尋ねたらいいのよ。何かお手伝いできる
ことがありますか、って。」

とさらりと言われた。尋ねることがそもそも迷惑に
ならないか、と続けて聞く私に、

「そんなことないよ。何をしたいのか、何をし
て欲しくないのかも人それぞれだから。」

と笑って教えてくれた。

障害は生まれたときからある人もいれば、病気や
事故、あるいは年齢を重ねることによって発生する
場合もある。さらに、障害にはさまざまな種類があ
り、その人ごとに状況や症状は異なる。このことを
理解したつもりであったが、私の中で障害のある人
を一括りにし、壁をつくっていたのではないかと気
がついた。そして、障害のある人はかわいそうであり、
一方的に助けられるべき存在であると無意識の差別
をしていたことを反省した。

夏休みのある日、今日こそは声をかけろぞ、と意

気込んでいたにもかかわらず、車椅子に乗って公園を訪れていたAさんに私はなかなか声をかけられなかった。そのとき、小学生の男の子の投げたボールがAさんの足元まで転がった。男の子はAさんからボールを受け取ると

「ありがとうございます。お礼に何かお手伝いしましょうか。」

と話しかけた。Aさんは

「ありがとう。何かあればお願いするね。」

と返事をしていった。このやりとりを見ていた私は体中の緊張がほぐれた気がした。私は何を気負っていたのだろう。それと同時に、自然とAさんに声をかけていた。

「こんにちは。いつもお見かけしていたのに声をかけることができませんでした。何かお困りのことはありませんか。」

Aさんは微笑みながらこたえてくれた。

「こんにちは。私のことを気にしてくれているのだろうなと思ったのですが、迷惑かなと思って声をかけられませんでした。」

Aさんも私と同じように話しかけることに躊躇していたのだという。積極的にコミュニケーションを心がけ相手の声に耳を傾けることで、お互いの想いを理解し合うことができると思うんだ日だった。Aさんには他にも多くのことを教えてもらった。状況によってお手伝いして欲しいことが異なること、もっと話しかけて欲しいということ、何かお手伝いできるときは私にもさせて欲しいということ、などである。だが、改めて考えてみるとこれは障害のある人に限ったことではないのではないか。私も話しかけてもらえると嬉しいし、助けて欲しいときと自分でやりたいときがあるのも同じだ。障害のある人は、ただ少しその個性が強いだけなのかもしれない。障害のある人もない人も分け隔てなくお互いに人格と個性を尊重しあいながら助け合って生きていくことが、共生社会の実現につながっていくのだと感じた。これからはもっと積極的なコミュニケーションを心がけよう。そして共生社会が実現したとき、人々の生活や心に「障害者」という考え方がなくなるのだと思う。